

佳作

水泳特訓

岡山県倉敷市立大高小学校六年 二神 佑多

ズーン。鼻の奥に水が入った。痛みと同時に鼻血も出た。やっぱり、神様はぼくに泳げるようになってほしくないんだ。

水泳特訓に参加しようと考えていた。ぼくは五十メートルを楽々泳いでいる自分の姿を想像していた。なぜなら、クロールを泳ぐ水泳選手の余ゆうそうな表情をテレビで見ても、ぼくもすぐ泳げるのではないかと思っていたからだ。

三年生までは泳ごうともぐるだけで鼻に水が入り、体がしびるばかりで十メートルしか泳げた事が無かった。そんなぼくも参加さえすればすぐにテレビで見た選手並みに泳げるだろうと思えば胸をおどらせていた。

ところが、水泳特訓が始まると三年生の時と何も変わっておらず、むしろ下手になっていった。息つき

の仕方が全く分からず、泳ぎ方も忘れている。ぼくが本気で選手のように泳げるようになれると思っていたことが馬鹿馬鹿しく感じていた。そんなことを考えている間もぼくの横を魚のように泳ぐみんなが追いこして行く。自分もこんな風に泳げるようになりたいと決意した。

その日から毎日、図書館で借りた水泳の本を一生懸命読み、ひまを見付けては息つぎのイメージトレーニングをしていた。そうすることで、練習に活かせると思えば努力した。けれど、どんなに写真を参考にしても、クロールの形さえ作ることが出来なかった。神様はぼくに味方してくれないと感じてとても悔しかった。投げ出したくなりながらも泳げるようになりたくて練習には毎日通っていた。

一週間後、記録会の練習をする事になった。当然泳げる訳がない。最低でも二十五メートルは泳がないといけないと聞いた瞬間、家に帰りたくなった。自分より年下の学年の子が二十五メートル泳ぎきれているのにぼくだけ泳げないのははざかしいと思っただがやるしか無かった。プールに入るとさっきよりも水が冷たく感じた。かべに足をつけ姿勢を整えた。心臓の激しい鼓動を感じた時ピストルの音が鳴りひ

びいた。勢いよくかべをける。必死にうでを回して水をかいたら五メートルを示す線を過ぎたのが視界に入った。まだ五分の一かと思うと苦しくて足を着きたい気持ちがあがってきた。でも、ここであきらめてしまったら一生後悔し続けてしまう自分が想像できた。だから、最後まで泳ぎ切つてやると心に決めた。一心不乱に泳いでいると手に固い感じをよく感じた。見ると手がかべにふれていたのだ。二十五メートルを泳ぎ切ったことが分かると、心の中でガッツポーズをしていた。初めて息つきありで泳ぎ切れたことのうれしさを急いで母に伝えたくて家まで走って帰った。

水泳特訓に参加して選手並みに泳げるようにはなっていないが、目標を達成させようががんばったことが成長につながったと感じている。今ではぼくの中にあきらめないでと応えんしてくれるもう一人の自分があるのだ。